

自立活動の実践

— 阪大分教室の取組み —

大阪大学医学部附属病院分教室

1 はじめに

本分教室に在籍する児童生徒は、小児がんや心臓疾患等で長期入院の療養を必要とする子どもが多いが、消化器系や神経系、整形外科系等の疾患での入院もある。入院期間は、半年以上の場合もあれば1か月未満の場合もある。自立活動の時間としては、朝のホームルームを毎日20分設定しているが、各教科の授業や特別活動の時間など、教育活動全体を通じて指導をしている。授業の形式は、個別の指導と集団の指導があり、個別では一人ひとりの課題に応じたきめ細かな指導が可能である。集団では、かかわり合いを通じてコミュニケーション能力の向上を図ることができ、個別指導では見えなかった課題が明らかになる場合もある。目標については、病気の種類や回復の程度に合わせて、一人ひとりの実態に基づき個別に自立活動の目標を設定し、具体的な指導内容を計画して、指導している。令和6年度の小学部・中学部の自立活動の実践を報告する。

2 小学部の取組み

(1) 朝の自立活動時間

病状や治療の関係で、病棟から外に出られる機会があまりなく、季節を感じる機会が少ない児童が多い。そのため、季節を少しでも感じることができるよう、教室の大型テレビで季節に合った動画を再生し、視覚的に季節を楽しむことができるようにしている。また、水や波などの自然音やリラクゼーション音楽も併せて楽しむことができる。

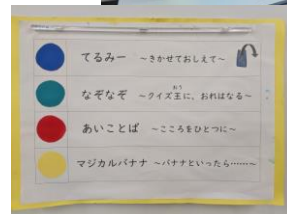
取り組む活動は、自身の体調や気持ち、興味関心に合わせて選ぶことができ、好きな活動で気持ちを安定させたり、他者との関わりを楽しんだりできるようにしている。児童はカードゲームなど友だちや教員と一緒にできる活動を選ぶこともあれば、塗り絵や立体パズルなど一人で取り組む活動を選ぶこともある。

当日の治療や服薬を控え、児童はさまざまな気持ちを抱えて教室に登校している。活動を選択できる土台を整え、気持ちに寄り添うことができるように工夫している。

(2) 朝の会

学年によって多少異なるが、朝の会の流れは概ね次のとおりである。

- 「1 あいさつ」「2 けんこうじゃんけん（健康確認）」
 - 「3 おはなしコーナー（日直の話）」
 - 「4 はてなボックスコーナー（アクティビティ）」
 - 「5 時間割」「6 ニュース」「7 先生の話」「8 あいさつ」
- 内容の一部は次の通りである。



右写真：「4 はてなボックスコーナー」で使うグッズ

I 実践報告

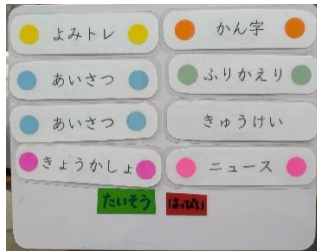
朝の会の内容		自立活動の観点（区分）
2 <u>けんこうじゃんけん</u> 呼び声の後に自分の体調をじゃんけんの形で表現する。 パーは「ぱーっとげんき」 チョキは「ちょっとしんどい」 グーは「ぐーっとしんどい」		（心理的な安定、人間関係の形成） ・自身の体調を把握し、周囲に伝えることができるようにする。
3 <u>おはなしコーナー</u> 「昨日のできごと」や「朝に食べたもの」など、日直の児童が他の児童や教員に向けて話をする。話したいことがない場合は、他の児童や教員からの質問を受け、答えることもある。		（人間関係の形成、コミュニケーション） ・経験やできごとを伝える経験を通して、気持ちを言語化できるようにする。 ・同年代の児童との関わりを経験し、集団への参加の基礎を身に付けることができるようにする。
4 <u>はてなボックスコーナー</u> 日直の児童が箱の中から球を取り出す。球の色に従っていろいろな活動に取り組む。	活動名『てるみー』 「寒いときに飲みたいもの」など、ランダムに選定された題に沿って、自分の考えを発表し理由を説明する。	（人間関係の形成、コミュニケーション） ・ルールを理解して、自分の考えを調整することができるようにする。 ・同年代の児童との関わりを経験し、集団への参加の基礎を身に付けることができるようにする。 ・意見の一致と相違を楽しむことができるようにする。
	活動名『あいことば』 「『あ』が入っている食べ物」などのルールを設定し、その答えが他の全員と一致するように考え、全員が一斉に答えを発表する。	（人間関係の形成、コミュニケーション） ・他者の考えていることを想像することができるようにする。 ・ルールを理解して、自分の考えを調整することができるようにする。 ・同年代の児童との関わりを経験し、集団への参加の基礎を身に付けることができるようにする。 ・意見の一致と相違を楽しむことができるようにする。
6 <u>ニュース</u> 理解しやすい言葉で書かれたニュースを観たり聞いたりする。		（環境の把握） ・社会や社会の動きに関心を持つことができるようにする

（3）教科授業

入院生活を送る児童にとって、自身の体調に合わせて学びの活動を選択できる環境の設定は、主体的に学習に取り組む態度を養う意味で重要である。そのために、国語では、授業のはじめに「漢字」「教科書」「休憩」などの活動が書かれたマグネットを選んだり並び替えたりして、自分で授業の流れを決定する活動を取り入れている。マグネットの選択と

I 実践報告

並び替えを通して、自身の学びに主体的に関わることがねらいである。ときには、「漢字」など苦手な活動を避けようとする様子も見られるが、児童の選択を一旦は受け入れた上でやりとりし、活動の取り組みを促すこともある。児童がマグネットを選んだり動かしたりしながら体調についておもむろに話し出すこともあり、言語化のきっかけとなっている。



左写真：授業の流れボード

(4) 考察

児童の実態はさまざまだが、入院している児童が置かれる環境への自立活動の観点からのアプローチとしては概ね次の三点があげられる。

- ・気持ちの安定、理解、言語化を促す（心理的な安定、コミュニケーション）
- ・外界との接点を補う（環境の把握）
- ・他者、特に子ども同士のやりとりを補う（人間関係の形成、心理的な安定）

それら三点のアプローチはそれぞれが独立したものでなく、関わり合って児童を支えている。朝の会を例に挙げると、「2けんこうじゃんけん」において、2年生児童がチョキ（ちよっとしんどい）を出し、それに対し日直だった1年生児童が「どうしたんですか。大丈夫？」と言葉をかける場面があった。2年生児童はそれを受けて「しんどいっていうか、力が入らないの。」と自身の調子を説明。すると、同じようにチョキを出していた6年生児童が「その感じ、わかる。しんどいよね。」と加えた。「2けんこうじゃんけん」という参加のハードルの低い活動を通して何気ない児童のやりとりが生まれ、体調の言語化と他者の気持ちの理解、それによる気持ちの安定化が見られたのである。

自分の気持ちを吐露できる環境、子ども同士のやりとりが行われる環境、外の世界とつながる環境の意図的な設定を大切に、今後も取り組んでいきたい。

3 中学部の取り組み

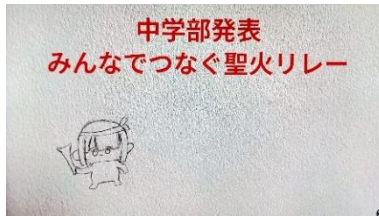
(1) 一般学級に在籍する生徒について

小児がんや心臓疾患等で入院している生徒は、治療の副作用による貧血や嘔吐が続いたり、入院が長期間続いたりすることにより、心理的に不安定な状態になることが多い。そのような場合、悩みを聞いたり、不安な気持ちを表現できるように声掛けをしたりして、心理的な安定を図っている。また、長期入院により経験が少ないことや、自己肯定感が低く他者との関わりが苦手な生徒も多い。そこで、病院内でもできることを工夫し、ICT 機器を活用したり、学習発表会などの行事を通して自己肯定感を高める取り組みをしたりしている。

自立活動の時間や特別活動の時間では、主に集団での活動を実施し、カードゲームや行事に向けての取り組みなどを、つながりを意識しながら指導している。治療等の関係で教室へ登校できない生徒もいるので、オンラインでつないで実施することも多い。

今年度の学習発表会の取り組みでは、「みんなでつなぐ聖火リレー」というテーマで、一人ひとりが作成したストップモーションをつなげることで、1つの作品に仕上げる事ができた。全員がそろえることは少なかったが、進捗状況を共有しながら、「みんなはどんな感じで進んでいますか？」とお互いを意識しながら取り組んでいた。

I 実践報告



ストップモーション



メイキングの様子

これらの取組みを通して、ベッドサイド授業中心の生徒も、他の生徒とかかわることで、自己と他者を理解することができ、自己肯定感をそれぞれ高めることができたと思われる。

(2) 支援学校に在籍する生徒について

支援学校に在籍する生徒については、自立活動を中心とした教育活動を地域校と連絡を取りながら進めた。

授業の開始は、リラックスできるように本人の好きな歌を聴いたり、好きな絵本を読んだり、手や指の体操をしたりした。そして、身体の動きを中心に、音楽に合わせて楽器に触れる活動や、物をつかんだり放したりする活動、紙をちぎったり貼ったりする活動、粘土や水や泡に触れる活動などを体調に合わせて実施した。また教材には、鈴などの音が出るものを付けるように工夫した。



マラカス(クリップ入り)



牛肉食べ放題ゲーム



ボール転がしゲーム

環境の把握としては、身体の動きと併せて、聴覚・触覚・嗅覚の活用を行うことができた。発声が難しい場合もあったが、手の動き(「はい」で手を挙げるなど)でコミュニケーションを図ることもできた。また保護者の協力を得ながら、1人ではなく複数でゲーム等の活動を行うことにより、他者とのかわりも意識させることができた。

本人の様子については、手の動きや表情等により観察することができたが、表出が少ない場合、保護者の協力により「先生の歌声に耳を傾けていますよ。」などと教えていただくことも多かった。

4 まとめ

今年度は、分教室全体で「入院している児童生徒の『つながり』を大切にした実践」をテーマに取り組んだ。この『つながり』の取組みは、自立活動に大きく関わっており、教員一人ひとりが、児童生徒のその日の体調をよく観察し、積極的に情報共有をすることにより、実態把握に基づいた自立活動の実践となった。病気の種類や入院期間等により、児童生徒の課題は様々で、すべてが計画通りに実施できたわけではないが、今後も実態把握に基づいた自立活動の実践を続けていくことにより、子どもたちの成長を支えていきたい。